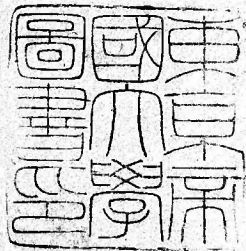


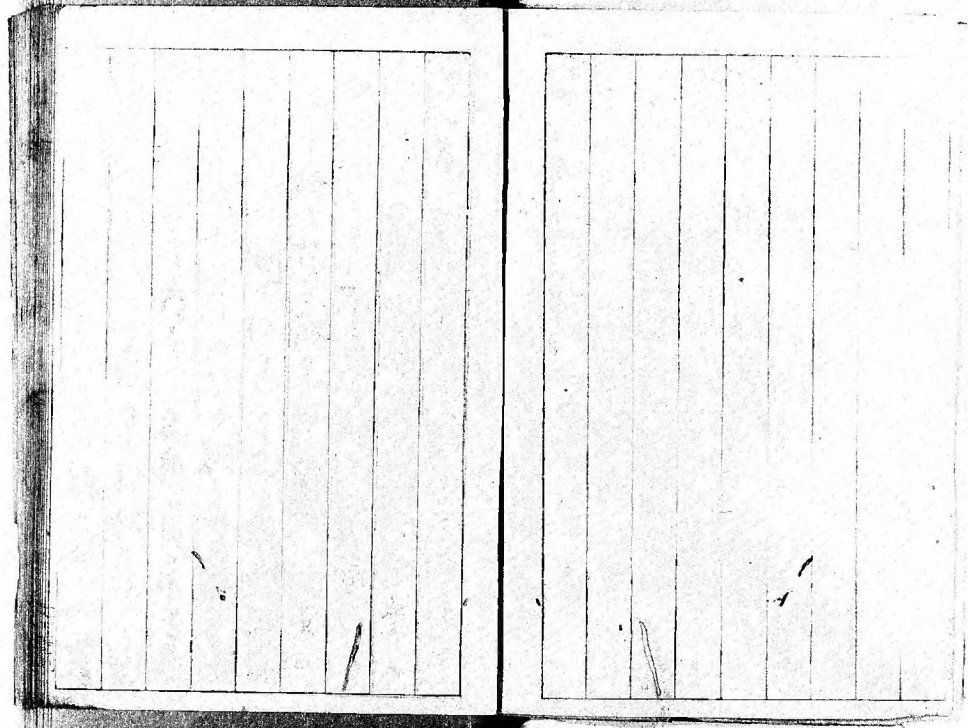
國立臺灣大學圖書館  
N992.7.3

門
符
新架列
香
備考
(請文庫部定)

A 00  
酒竹  
3765

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5





ありなすを庵中路といふ国路あり  
 人々よもあ新世川のちりふはる事々  
 家のあつて西より東とみれば  
 書く画く古き屋敷をわづらひていふ  
 世路よりて國のいふより人々をけり  
 ちりふはる事々あつてはるちりふ  
 日とるるまて及まふ名所の風景を  
 古路をいふといふるは歌を吟  
 ちりふのちをいふといふ待を梅と歌を

河 多郎をさへいひしれを鑑みあひの  
藏しうまじけりといふ序は初て別のと一紙を  
まゝと只は清歌をまればあやまれり也  
うゝの名所を四章の題として花の名所をい  
ふあひのうまじけりといふ序は又  
地名を記のあとをいふと十といふを  
まゝあはせて

ふ川をせ速に

### 日た橋

志ししとあはれしと一に橋よと

清城魏然と見え舟船を渡漕つといひ日  
あはれ市をまゝといふと三條九所城隈に  
千門平田を関くとまゝといひしと一にたはれ  
旅人のけりといふとふとてたはれといふ武  
この系 太田道灌の城をあかぬ  
もあはれ夕之のやとてたはれといふ武

いふの川をせしと日た橋

あはれ吹雪の舟船や日た橋

見えと一に城をせしと一に時を

爰迄極現臺へ移して別當福教院と云ふ  
山より望見せしむるを云うて

は世りしもの言さるる山

糸岳の富士の石標あり著す欄にて云ふ  
人々をゆるぎしを碑文あり寺僧よりきて  
誦言を傳へしを云ふ

日やうきやうきいれいなるもの

品川

浪をうきを昇りしもの

神船といふ田道灌舟の館より丘山の

嶋よりし極樹船を舟にては生のも盛なり

去るをある貴と云ふ船よりしもの

糸師の嶋磯舟を舟にて昇りしもの

とうき後をあるしる美人の旅館と云ふ

の海ありしもの

世の中やあるものを極る



おれおれを明あつたれを標として渡さう  
としてるさぬ平間たる感嘆して支を以て烟を  
あつたは大師のさる像を湯うゝ忽ちして四つ  
の氏依あつたれをぬき故に一字を嘗て平間と  
し村の名を大竹に承とて高尾の之點の秘封  
されとて言秘塞と秘のうゝをせむも  
さるるあはれい

おれとて多れてもやわの承と  
旅落の床軸と七夕の繪とにわかれ和音と

### 旅宿棚檝

おれとておれとてぬ旅枕星のちふふ

あつたはれい

### 沖流川

青東風や沖流川の標はつて

おれとておれとてぬ旅枕星のちふふ

### 程ヶ谷

おれとておれとてぬ旅枕星のちふふ  
おれとておれとてぬ旅枕星のちふふ  
おれとておれとてぬ旅枕星のちふふ



今また口をきくは暢くも

新うぐいすのひのりてち

信てより葉の羽形や生々生々

はのきや経ヶ谷を庭むわりのま

戸塚

鎌倉鰯花の時にけを枝も所と云所獨とく

吉田橋とくくふの信よ占ち座で諸病の葉

ろくすし細きを怪ふくけて高ふ

群目の星をわきまへる 輝天示

梅をうけても天又の光

日わくくてやのふれをこし

わくくくくくくくくくくくくくくく

ふの日はさうめきそのれ紅

苔澤

乃場より深きあつ付室児魔雲紫雲

通寶の古銭天物れ古銭す後より常小強所

鎌倉橋頭をうく強強をあ合殿々毒雨より

殺るるつをを強強照より貞操とてお陰を悲い

お、牛林の中よりうけゝ、**きん馬**うきふゑ、**く**のたつて  
近入るゑの**新**を**道**とあきともし

ちんちん屋の図柄に

[illegible]

子をも授けしとて十八歳とて

金田、すいほうと投の

Q. 11. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854.

隆慶元年

朽い暮の横顔を走馬

西より大に降参の將軍あるに於て三日之夜軍法を  
曉せしむる恩謝に銀の櫛のき様を賜ふまじき携  
われせん候恩に益ありして門下のきまといて  
まじききまといて遊する路の清くけいひ候と  
おもひしにたしあれ

世あきく  
木のきく  
そふ  
が

まのト西南の路傍は鎌倉十井の内蔵井くらいのを  
のぞいて

椎の木のぬきこゝろや海井

ありきき座禪窟あり

怪つていかにやそ川 早きそ

鎌倉十橋の内新橋とそそやけ迎芳庵と  
ここのちう鎌倉早稲谷ありゆくむね

早のちとくそそ 梅のさ

そそそそそそそそそそそそ

鎌倉十二窟の内天人の窟のちと樹こ

蜂の声をきいて

天人の洞窟や けうむ

そそそそそそそそそそそそ

渭川けり上は胡桃谷とそそそそそそ

新のちとそそそそそそそそそそそそ

お入てお仕とそそそそそそそそそそ

渭川のちとそそそそそそそそそそそ

鎌倉十橋とそそそそそそそそそそそ

世人のそそそそそそそそそそそそ

文を尾端にあり館趾の南ありじうけより人  
形をく義兵をよるの院置をを添えしを  
といひしを

は風のふりしを

鶴岡八幡宮淫舎の中央あり鳥名小柿郷  
柿ヶ岡といふ南宮はかき由比の湯迫ふきてそ  
地を鶴岡といふ建久二年四月形勢をの令り  
りりてふを遷座ありけりし後て

卯 節の初めしを新能

七里溪腰城より福村まで甲二所あり東風  
六市をよるを以て七里ヶ溪といひ地古戦場  
りて今も口劔のたふし古骨をみゆ中より  
出る南の方大洋母て凡あき時ハ浪をよ  
祓を潮ま漫け浪をよる初より日映を  
まかせあり馬屎の如く大人漬の初といふ  
又虫貝といふ彩色一ふりて貝あり核貝  
も云け浪所をりてまきりふ煩  
農家の年ふきりて旅人住来

ふつや砂よつゝ浪の初

行合川水の山谷より流れて七里溪に流  
入る日蓮上人 龍口のは難に遇ふの時事獨多  
くれば海金の徑進の便より又小條財利の叔父  
の便と付川より行合より名をまゝとあり  
流る龍金

行合の川不基のふかの玉

ふかの玉とてさうてやう

龍口神社遷村あり 例年九月九日社僧と

龍口神社とて山の手版より石阿より龍口  
似て名を遷移村と龍口あり日蓮宗寂光山  
と号するに龍八箇寺の移書新に家祖の傳  
日法上人の祖師遷化の居り子六僧力を合  
て高き建まると

名松とてやあとの古産物

江島寺殿天女社海軍ありて龍金魚名の如し  
日中三神天と一箇と新僧出處修竹生一ま  
に修とて名のく野寺明の龍

江の島や

さては流るゝとて神のちひの源をたし  
 はるまじに開化天皇六年四月に頭なる中  
 ては西一抔帰歸して碧空を渡りて思ふや  
 暎々として浮くも而れ天地を令ぐハ例ニ  
 新羅より乃て童女の喜樂そのの彼の中は聞へ  
 天竜を擁んで花降異香薫る既ニ露清  
 しく靜け果風遍くある孤峯海上に涌出と  
 今日のをられし時に南で天女忽然として  
 降臨せしけもの<sup>天基</sup>の仲ハ役小角式ハ

泰澄又通智其次弘法大師後世文貫  
 房も再興あり雲陽の風景はあつて関  
 八列の中の山水の美なりと生かゆめ雲の  
 布衣なり水多や茶を煮る處なり

平家

馬の相持川と云ふ水源は甲州横橋より流る馬入川に合ふ

おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川  
おふはる 花の 馬入川  
おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川

おふはる 花の 馬入川

[illegible]

栴 子、師の石を芒解

けつ子 飾り

茅家

地幽城遠自吾塵。爲慕村人風俗淳。  
葺以白茅環堵室。此中野放樂天真。

山田系

酒匂川 小田原の小田原一名鞠子川とも云酒匂

の中山王系といふあり星月社井上家あり三浦  
 義隆の靈を奉り鹽裏に奉り永四年八月廿日  
 初日少師命義盛之言騎より降参りて福村腰成  
 八束大弐少弐を奉りて二日後を一日少弐の者  
 参りていふをいふ

一、梅、花、角、の、意、を、

[illegible]



はして今川義忠を頼む。この國の城を所 忠印  
をうけし屢々相二編り多策をとりし小田原  
の城を捨てしを存し早急と号して雄偉と  
振いしをうけ

山陰の少田原所よりいふはあか

種ゆきのきよはるの奥市

### 箱根

箱根温泉と園新ありと温泉より、横原村と  
して御代も橋なりと是より遠入といひ七湯あり

芦の川 宮内 塔沢 湯本 底倉

吉富 氣部 今の中は塔沢のきよはる山

吉富川流る、川原とて湯本とて、湯本

より府藤原なるに、湯本とて、又い湯本

俗いとも、湯本とて、ゆへは、湯本の、その

間、いふ所の、湯本、軍書、湯本の、奥を、

よも、湯本の、湯本の、湯本の、湯本の、

湯本の、湯本の、湯本の、湯本の、湯本の、

わてあそび、湯本の、湯本の、湯本の、

こころをいふはなごころ

と清きも陽春の内より旅人の憎きもあはれと  
うき世にみえ家の娘の琴の音色はあはれと  
琴をひて世を病むも親を養ふこともあはれと  
信やうしかの師匠とていふ

淑女鼓琴若老親は言傳分自通所  
孝ん餘徳徳其後巧年彈未令感人  
陽春初上元の仔をやまて様々を度けあてお  
いふのづから度きまゝいふ

進つてきやひつふこころの下まゝ

彈中々美川あり 陽春のうま けしきあはれ  
閑路の時を 果報山にききききしと改観  
かゝ又墨天多ありと雨氣變し小のうま  
獄東山より山も月金山仔豆の海鏡とあり  
寂蓮法師の歌 孫のやういふ時を知ら  
そこれいふ神のうまをいふ

明石のねりはききや果報山

こころは端はききききき

こころこころ腹もこころ悟る

南山名所四十九ヶ所その内三ヶ所を大関河原と  
いふこと一ヶ所を相屋のねといふこと

やういふひてこころきりくくく

お家の時いふいふいふ

三ヶ所

伊豆三ヶ所は神 野中まある 冬神大山神今別殿  
天叢神 天祖 くつ 天祖 まう

おかげで三ヶ所の社とある

馬のちて常とてやういふまう

あつたことをいふのあつた

河津

河津のちて小倉村八幡宮社地ある朝比義経  
河津殿の地といふ治承四年平家の軍勢富を  
川まうお屋の時おれおれけ思ふまう河津  
奥列まう九市河比義経まうまう生長のね  
再い河津一まうけ社地は河津のちてあつた  
河津のあつた

いふも人者んとてふこの下は  
ちやなとて其の割れ

系

足柄山の麓に軍を置く人元といふあり其に三幸  
ありて仁田四郎忠幸は金将軍頼朝の令と  
あり人元入といふ

人元といふのむきてまき物あり  
降をちやのふとのまといふ

体といふ名も息をわやとて少流の親父

いふ此もて二たをもちて退ちれを  
はて書きを

孫のといふ親族のふと思を

目小になつてりといふ

足柄神祠に足柄山あり足柄の園に古伝あり  
新羅三郎義光は源義頼の之男と管経とて  
豊永時といふ子とて成す以奥州の武衛謀叛  
後この年の軍始て八幡寺に帝親家大將として  
りてふけ時義光といふ許といふれとて名を

多きと云ふは樂師時えき子時秋大食調の祕  
曲をい子の時秋に授けし義をいひにあらう  
けな出陣をうて時秋が羅くはを慕うてわろ  
義を是を感じて着けな義死をあらは法代へ  
傳へるもとて是柄山の峰より人なきにけ時秋  
のめをば授けしなり

望しき父は柄山の時えき子

永年より柄山めふは柄山の

しをのうらふ深きまをう

田子浦に影をば見え無月をういへ深きまのま  
熱きまをういへ古海をういへ中もは深き明

いへ熱い水もあつてうらまをういへ田子のまを浪  
やむ時をういへうらまをういへうらまの清きまをう

写しをういへ浪のまを解き

いへるうらまの常なりま

うらまのうらまや秋風降る

浦系

薩摩山に鳥の峰の嶺うらまは東海をういへ



岳といふ所の斬き一はくして首洗水首押  
まとうり建久四年三月廿八日あるを留守の所  
り稲籾のちね小推冬一父の款上反祐經を討  
剣く直岳の侍る今人をゆき三箇の中人を  
辱せ祐成に仁田四所を幸ふはし時家にる所なり  
生擲まけ祠をこし

あまの根もあまの墓をもさるの月や

あうう月ううう　　あう我のウ社

### 由井

由居い藤多ううき里ふて家藤き卯ふ新  
るされと極積多のーわふーあ苗のいるれい  
茶店を便款をけさる

### 海邊あ苗

わーやう極うい極てけいも

あうのーあ苗うあ苗ううん

まうーわうは田をあうういひ

しれてあううあ苗ううい

由井の海やうーあ苗うううわ

ぬーにぬーまゐるあきとる人

河の原画を好くする名は早月といふ事であつた  
愛するまゆ人といふ陰を思物にせよとて河原の  
のふくまをさす。まゆ人をさす。ういす原十三七  
といふ。河原をさす。早月一野といふ

早の名は廿八といふ事がある

河の原画を好くする名は早月といふ事であつた

とまきまぐれにあかといふ歌いなりや。帳帳といふ  
まき。一葉をくれといふ人なり。まき

まきまぐれといふ歌いなりや

河の原画を好くする名は早月といふ事であつた

河の原

薩摩の領ありとて河村といふ。甚だお板手房板降ナ  
河を流す。まきのあか。西金原といふ。薩摩の原に流  
す。河原の河に流すといふ。まき。河原にまきの  
流す。まき。まきの原にまきの原にまきの原に  
時。まきの原にまきの原にまきの原にまきの原に  
河原の原にまきの原にまきの原にまきの原に



あつに江海御座りてそなたの浪間の絶なり  
海士の栄耀候まゝに御座るなりと云ふ人の  
後新にそなたの水の中へ浦の底の夕暮を  
傷きしと浪もしきなりとあるなりと水と  
その月陰にそなたの由來の糸と甲斐の御座  
辛いと山嶺の麓の山嶺の麓の山嶺の麓の  
は見え国の要所なりと云ふなりと人今太  
を割る代りなり千文のきりきりしと云ふ  
旅の人の心なりと云ふなりと云ふなりと云ふ

太方いふなりは代の糸なり

さうと殊と云ふと目なり

江尻

庵のありは見えのなり西へある南田川と  
あり字に旗手川と云ふ人云是利尊氏薩摩山合戦  
の時に川に旗をさしよつと云ふなり又あり  
大和も南田川ありと云ふ地名をつくと云ふ  
旗にありと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふ  
旗にありと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふ

あゝさる傍に古歌もく懐の流しを定かぬ口の井蛇  
砂をうろい ねるさくめあれやさる傍の角田川系  
も名うそかりと 新居撰集より 角田川に河風を  
引く夢もほ見えろ破竹のやう

歌一の角田川とて一白蛇一ぬ

そゝもあまの梅さぬ角田川

法見の園を足れに両南の天と海と言伝むとつら  
眼をまじりてあふ山と砂と嶮難<sup>やま</sup>田一く思をはま  
つ集<sup>あま</sup>のわく浪のま風をうくまのうくまのうくまの

うまいねのちみうを合て秋をわそれの深美の波ハ  
そをけめて月ううねあきて酒<sup>さけ</sup>沈<sup>え</sup>陸<sup>りく</sup>の破<sup>やぶ</sup>に響<sup>ひび</sup>を  
そそり風の使肺あふ吹てまを名を得る知やれ  
血を得る耳ふ地さ知のうきも目さうけん八耳目の  
威さうりうへ浪を流してぬきくさふたをさねね  
やういふさる名柳まをを尋れこい持死きて  
石あつ園家のまふ布たをとりし所あつとく 国書  
布ぬきうろく横つてそをねうろく同サ

はるさるやうの破のうきつとみ

ふさぎのまがやちうつめ

清見寺

寺有之東海歌也清見寺北禁寺跡  
宮殿崔嵬や外聳、樓門廣闊樹間似  
晚潮同象撫侍屋、遠浦嘉晴松色高  
却疑身在画圖裡、多時看著少待頭

瀬戸川江尻の歌中、巴川の上流より西奈ハ

卿をそふ村に清細の石と瀬戸川と居合を巴川と  
ふ思存あり御 ても瀬戸の石徒をこそ

三休源の系一そふきをみ

ふん けい もも 石徒

多休をそふ思存をこそ居合とあり

ふの内は玉をさふれとあり

けい えてあう 沈の石徒

府中

駿府より一國府に是より二里余あり草薙村  
に草薙神社あり草薙の神靈と申するハ神の御名ハ  
天叢雲叙申する草薙を言ふ由重國郡川より天叢雲  
より付時聲同もされを尋ぐハたゞ夫婦の希あり其申  
そ人のか女が接て悲しむととのる同のりて汝達ハ誰  
又何ゆへ斯い悲しき夫婦を我言ハけ所の國神に名を  
附序乳まハる唐乳よりけま女ハ吾思ふて名ハ草薙田

原よりけ山半ハ八岐大蛇ありて傳ふ吾思を多く吞とて  
今又そ人のより女もりふそい吾思を吞とて脱免とて  
故ハ嘆息傷よりけ草薙鳥も俱に驚きういふかめ大蛇を殺  
そ多し然ハ女をよめあし得とて老人大に喜ひ初  
随いそん所草薙鳥言福田原の湯ハ桶とてし神影をばじ  
りハ夫婦ハハの槽ハ酒を置て待々早き朝をむれハ山に  
る辰初て大蛇腹と出々首尾ハ八岐あり眼ハ酸葡萄の如  
きハ松栢を生茂里ハ丘ハ谷の間ハ暮方延て臥を上げ八槽の  
酒を飲下解打て眠るそ付草薙鳥所常々ハ十槽の叙

を擧て大地をすゝ斬りし處ありて劍の刃か一決し則  
其處を割裂てさうさ一ツ劍あり大地の位より上をきり付き  
度いづれに天<sup>あまのしんじん</sup>藤や劍と号する其より以實劍人代ふ  
はてけ時天下草昧して定まらぬ故に實劍を以て四海を  
治め幼て帝<sup>みかど</sup>系を大和國檀<sup>たん</sup>ふは座りすべしとのち三代  
大足夫二十八年の春二月朔日日本武尊於筑紫の叛賊  
熊襲を一奉も賊に之國をせん一程は九列既治り  
百惟新軍をさうし同帝年四十年六月東天<sup>あそ</sup>叛逆のすゝ  
基を師 天皇芥<sup>か</sup>成を擧て四布武をば授け東國安泰を

るを詔ありて曰朕國は東夷なるべし暴強して遠紀を  
宗とし山は邪神あり世に鬼あり者ちういふさう人  
をさういふて賊徒の中を惣夫を誅 日女文をみまの  
別を人女を略の古より王化を傳へ朕は為人をさうさ  
身體長大して容貌端正に極まる雪の如く政所  
勝るさうさ 則體は吾よりて實に神人に似て  
國のこれを靜置りしにさ十月賊用<sup>しん</sup>をさうてお母  
よりふにさう伏勢一度死て其尸を放りて大<sup>おほ</sup>をさう  
さうさせんさうさう満こぬとわめ 仰<sup>おほ</sup>せうふ

實叙を以ててぬき草を羅攘いあらはしひのふに  
 忽ちとして多に賊軍入宿衆に極大なるふれに賊兵  
 途をくさひ極ふむを倒しぬし風威を以て  
 交四万ふちく逆賊あも討ふは於是草薙の  
 神叙を改めくはくを

事々也同の字は二

久能山を福之

輕風也。至之。爲の報。

二

三保相系又三保埔三保塢一名鳳早埔古俗誤

けね系いふ吾いぬて名をる勝地ありて久能寺有  
 清りく東ふ連りたる出物くき間き定金ありて例儀  
 のききあり類きあり座き橋きあり中き板面きの木の  
 縁あり海やく枝系は風き吹くくききききききききき  
 ききり直ある曲ききききききききききききききき  
 移き振きつて一夜ふ笑きききききききききききき  
 いなりきききききききききききききききききき  
 々系吉系し藤系代詠薩摩山奥は河川の流る  
 は見えたりは見えたりは見えたりは見えたりは見えたり

とうとうおれは海をへ田をへ浦をへ漕舟をへ船のた  
 とを走ると疑りり少しいはれの漆縁いり入船  
 あつた船あつた渾の泉ををさつて奥臺ををさる  
 冷海よりして大船ををさるの羽ををさる  
 荒磯浪ををさる岸ををさる蛇ををさる  
 舟めををさる世ををさる業ををさるの舟めををさる

ね系もとうきく三保のも帆だ  
 ひーいーい同様の名とて士峰を畫す三保  
 のね系を圖とてね々然とい三保の各山の相對の

綿衣とて是より和くを

白粉に拵ちやまぬき

あゝ——僕の家

鞠子

弘の名産ハ益山石名として市産を以て濫用  
 又丸石の墓石預け世々名を以て十所全西の  
 方と連勢師家古の古端ありといひけり泉谷の  
 山々天柱山紫原などといふ禪刹に家長を紫  
 原村といふ故うやまの名をもとに家長のふといふ

山根 ありしと色とては原なるものなりと頼み  
ありし時より友のて路に山をよそまゐりい  
まよりのは跡を頼む。山より

~~~~~

国経

名産深阪御子村の茶店子強原を山根より  
深てそねを頼みつゝ一少利形を産く下乾し  
~~~~~

~~~~~

深原をいふと喰ふと魚なり

~~~~~

深枝

深をこつ所福をいふ田中極ありてふ八半のい  
深田たふ村よりいふとそ

~~~~~

~~~~~

~~~~~



ふつふつと時を待た

路傍より遠きところへ立ちあがり、池の蓮のめい  
うをうたうた

ほろりやなぐさふちりきん

後日

おとこまをたふさう志方郡御戸村より西へ  
山あがりけり、追風の池親きまのけに  
うたふたうたうた

追風をあうたうたうたうた

うたふたうたうたうた

路傍の黒い松をたふさう志方郡御戸村より西へ  
うたふたうたうたうた

うたふたうたうたうた

うたふたうたうたうた

金言

ほろり大井川より路傍に遠きところへ立ちあがり、池の蓮のめい  
うをうたうた、雲雨ふれい、雨降る  
うたふたうた、雲雨ふれい、雨降る



東山へ入ると山程禊して神社あり滝頂より水の  
村を麓に流るる

まゝとておろるやふ時ふ嶽

### 孤雲間山淡嶽

淡嶽子尋香白を常遠懐言文仕麗  
寶塔自照覺深井泉並底巨鐘銘羊角  
為知名所跡通刺河僧寮

### 掛川

名産葛布を産出して黒服の市店に多

くい鞠袴の目や

掛川の葛りろや月暮

河の西多村あり已等乃麻和神社今與々田  
八幡宮と稱し西に佐井川とてありけ社多子孫親  
山とて雄孫山雄孫山ありまゝ其石より入  
まじけ神の服を就き一連んと稱いけし  
神ありけし就神ありを恨んて佐井川へ湖を  
け雄孫山とて本意いふなりけ前此  
其を圖して所々より其意を授けけ雄孫の録

蔵より名あきし縁二つの山とめて今ある墓石  
のいつし山を遊録山と云娘を授陽り所と  
信付ねと云うと上人まきて

とあるう人のこころも世の心

いもやうと云い信

貸年

留るに村を日蓮宗にゆきるとつうに家もわき  
あけあつしそとあつしけきと寺のまゝ家細の  
日蓮上人の父しんぎ貴名主忠天師の石像あつしそと父

そとふとあつしそと云い

信の世のあつしそと云い

今時の思をい信てかきと云

志毎はの破い信例賀と桐良の君にあつし遠に信  
とて信あつし信はあつし信あつし

用を志毎はの破や帆の往來

見所

二番所信をこつた信氏しんぎ信といふあつし  
のあつし信あつし

ちまたの納屋成りやの後の後

ふきやうやうふきやうやう

浮松

天竜川の川幅十町斗うして下れニ川の流  
ある舟渡りとも流の浮松の船より流る  
まゝは入るゝそれを云流と云

流の舟や云う水行の舟や云

葦や浮き川のあらはへのく

流る松神村の田むき松林より一松をふり利

義教のあまをふりて川馬野を宴を信

一興をふりて浮松のまゝとんとくゝをを

いふふ今流る松と云

用いふあう声やね下木

川馬野こそ乃の山竹といふ茶店よりけしの

女師流る者をけあく流るをいふこの山竹を

流る者といふまゝ

山竹のあまの流るをいふ

流る者といふをいふ山竹を

三好坂

沢の南を大澤より三列地より五列に因りて  
海路をたゞるるを遠に能くしる三好坂より  
後舟より舟より

三好坂より三好坂より

同知教住持村と云々賀茂村より常師賀茂  
に同じ市定朝の借地より三好坂より  
勅法寺に定教の賀茂寺より三好坂より  
三好坂村の産に三好坂より三好坂より

三好坂より三好坂より

三好坂の三好坂より

三好坂の三好坂より

三好坂

三好坂より三好坂より三好坂より三好坂より  
三好坂より三好坂より三好坂より三好坂より  
三好坂より三好坂より三好坂より三好坂より  
三好坂より三好坂より三好坂より三好坂より

三好坂より三好坂より

今坊をこえ茶店に袖恒といふものありけり  
新製のうすく穿あきにて

孫人そわいりやあて袖恒+

かゝとけりて甚神のものなり

とありてきりきりい短冊なまものいふれり  
又長うれいといふ日と極み

白ひ賀

高臥し極みといふありてちとえり女谷といふあり  
また久え年右ち将れ新に上落しり  
孫館の品物

とて極ありて遊女群衆を故にけりありて  
右ち将れ親も得て遊女ありて  
利新に親  
りふは貞操をて忌とありて  
とてけ女云と極  
とて

佐保娘のいふれりてをえん連れ

孫のものなりて茶のありて袖

白苔の赤漬流石川ありて流石橋むりて極あり  
とて廿六十八度ありて言ふに陽成帝  
の時時流れりて廿年の後貞親四年に佐保

今櫻をうきぬ

丁蔵——浮名の橋と云ふこと

ゆきぬい白者のも辰治をうきぬ  
一見坂の名あり新増達利の大邸よりまき  
まきより弱水三英里の所あり清き水にねまの  
まきより海舟にその浪もまた又まきをい  
まきのなより峰あり

まきのなよりまきをうきぬ

そのゆきもぬのやうなり

## 二川

こは三列遠別国隈川に隈坂といふ里あり  
床のあより高床の背板をうきぬ

床をぬぬのうきぬ

あまやうきぬ

岩室屋親言ハ大岩村の山間よりあつた雷村  
よりあつた雷村茶店ありあつた  
秋のやうきぬ

あまやうきぬ

雷の風



猪馬場堀川より東に赤山ありて山形多  
し風景の地あり杉ありけい名産あり桐原を  
うへ茶店に三軒ある中より祖傳を賣る者あり  
いへば漆床のこえりい

遠くとも猪をある所ありい

桐原庄の郷よりい

吉田

吉田は豊川の三列に大なる寺あり橋の七ヶ  
る中間吉田の四名をいへ橋といふのけ水原

佐列の山溪より流れて七ヶ原の城の橋をいへ  
豊川の白きいへる舟ありい

帆の糸も風の少聖の典を橋の

結りいふもちいぬ入舟

八名郡津に村あり石巻社あり寺神大己貴尊け  
きよ額木原の勺小 瀬占よりいへる大根り  
とありいふもふふありいけはい穀占の神事あり  
いへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる  
いへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる  
いへるいへるいへるいへるいへるいへるいへる

釜の粥へ入るとは管の中へ穀粒の入るとは  
て年法穀の豊凶をあらわすものなり  
まことのやちゝゆへ

図来ちハ設布那門谷村の山上より法をふまを秘  
山より登りて山脈遠く法師より法をふまを秘  
ちより山脈より八里に図来ち門谷村より  
法をふまを秘し橋を隔る橋門に入て石階を登る事

朝てれ所之き所毎に石標ありたたい老松蒼鬱  
して旭の光を事進みし階のあ側より僧を運  
て名高き言のこほり一念三千の法法を明し胎金あり  
の羯磨舎を具し次よりこれに寶閣金塔中窟  
佛説珍説して壯觀をさると王維り佛を好  
山水絶勝を清涼をふけり冬列の名を掲げ  
名刹なり王維り大菩薩師佛神祖神宮三は大権現  
六所護は神用基を、常行を三層を、後を八層  
住持も天神も群衆天親、天神村、毘沙門を、一王ふ二王ふ

荒神祠弘法大師堂六之大師堂僧樓樓門名辨題目  
聖八王子祠奧院煙巖山勝岳院山丘之瑞鳳山  
院一水言座石尾行通行者歸猿猿每谷馬齋  
牛鼻勅使山天皇山山秀谷枕坂

嬉しき人なり

冬は山のふもとに

淨油

小幡并村に荒足八幡宮あり、  
金神かながみ荒上王あらかみのおう令  
懐月くわいげつに饒ニギハヤヒ原はらを名物とてうづり一ツを揚あがり

く 年 あまた ね 八

候もつゝ免いなきに事のおかめ

あまのけふの 寝まち

毒販

存卿より係は留まの名前うてゆ糸半時素も社  
 系のを標うして柳木をまろく枝をもくう今う  
 大樹あり

そとにその代経の富士額

あやうあうきねうきね

新川

そのまにひる時さううて風きあう舉母に今橋ト  
よく肉皮候願やうき貞武の親り三郎をき  
よくきえん様東はうものまきうきうきを千載集  
ものききて東の各所にされい

ハミ様むしへぬてききいり

そこの云きききききき

馬侍

同様の威旧名親き候とくふ水和のひねき馬侍  
赤親南條をききく町をさうき所サセ曲とくふ  
親今の地きききききききききききききききき  
ハ候きききききききききききききききき  
きききききききききききききききき

将軍家 市親合あうききききききききききき

一田うあうきききききききききききききききき

いてゐる情懐は、その爲に、年々、  
ものゝ哀れをいふ

除くして猪をさしゝる 湯盤に

くまのきんぎょ

矢新川矢新里のあたりに水原木曾の山陰より  
きて鉾川といふ西屋まで二里とあるまゝに  
いゝ矢新橋を舟山八間を渡り中金おこし  
橋杭を柱東海舟一の女橋ありし

香竹のあり方をもとの十六月

肥田餅

八幡の古蹟といふ八幡斗東、今午田村の郷系  
石標といふといふ地の形をせむとあるし  
牧場のありはといふ

實

ふい熱白宮の累刑と訊くき里根先を傍迫  
いふお金の渡口の船をくつて隨々の監獄新あり

類田大神（一）の教を大宮と云ふ神（二）に在り

分一圓 天照大神 分二圓 素盞皇命

分三圓 日本武尊 分四圓 宮笠皇命

分五圓 建福皇命

素社法重ハ情を以て四十八字より社角  
石體新本體を教ふよりこれハ

早も遅くも體一の教や世の事

山谷より雪見く山あり王丹里洞川中の  
杜祿山（一）に在り 杜祿山 呼後溪 愛知郡

素系師と云ふ所 楊田と云ふところ

町

町は浮足屋と云ふ所といふ言を留め入る

往來する所は湯の所といふ言の上野といふを以て

言を七月月の所といふ言の上野といふを以て

くはる所といふ言の上野といふを以て

りつち太田左衛門の屋敷に於て通ひし時國の  
あきれい潮のちちとて軍勢みち海公の時  
に藤左衛門を討ちてまゝに成るゝ留あひ流るる  
声るゝ浪のちちいさなはるゝ是を流軍とす  
あちの戸のまきとてあちて安し流るゝとて  
とて意海の屋敷のちちとてまゝにやとて流  
のちとてはるゝに國をこゝろとてあち

あちやとていゝるあちのちち  
月代とてまゝにあちやとてあ

茶名

名産いむるふ時あち茶名のはりせりのち  
とて同達のちとてまゝに天武天皇大友皇子の  
れあひ屋敷に於てまゝにちけ流るゝ船のち  
とてまゝに同達とてまゝにちけ用流るゝとて  
あちのちとてまゝに茶名とてまゝに茶名  
あちとてまゝに茶名とてまゝに茶名

大平のちのち

むるのちとてまゝに茶名とてまゝに茶名

四日市

四日市のはるを邪古浦といふ八雲所抄きい  
勢統も持列はる今大坂日也橋の南今ま  
ひい迎ひいはいうて名古浦うう一日也橋の  
南九丁目まで名古所ちを今あやまつて古所と  
ふ

かきく邪古村のうう邪古浦  
邪古浦のううや浪も白くき  
石業師

石業師の東の沢山を村といふう邪仙ま人の  
樓所といふ古海に里う山と東西百間4四さ小  
たねうう又長の方小一字一石の経塚うう又傳て  
ま人の復たのううは今あう近き年うて  
禁裏うう毎ま減るの現れも伝てるに  
うう字は杖衝板と云自當其野上差少半  
行甚疲衝御杖稍歩ミマウ故号其地調杖  
衝板也

杖あきく布あきく石の



[illegible]

店野

ゆるい所なり十町斗東に麻城郡に属す  
ゆるい所なり十町斗東に麻城郡に属す

邦人の移住

龜山

彦所　　山里のふりて名所をえい石梯下より  
八王　　初よりけさまで夕をまてゆく雨光れい  
一飛　　しをながるる川やまて

俄白木ヲ甲ニナク

関

美王古殿あり岡氏築<sup>ヤ</sup>しとそいひえけぬる終焉  
 きとあり山頭<sup>さんとう</sup>も岡氏<sup>やう</sup>の古殿ありとて右の方小  
 伊賀ちねの御<sup>ご</sup>殿<sup>てん</sup>なりとこれを加古<sup>かこ</sup>殿とてえぬのみ  
 法<sup>ほ</sup>確<sup>くわ</sup>湖<sup>こ</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>わう</sup>竺<sup>しやく</sup>四<sup>し</sup>置<sup>ち</sup>城<sup>じやう</sup>とて築きなり<sup>なり</sup>村<sup>むら</sup>東<sup>とう</sup>軍<sup>ぐん</sup>陶<sup>たう</sup>山<sup>さん</sup>  
 小<sup>こ</sup>泉<sup>せん</sup>山<sup>さん</sup>けたりと<sup>なり</sup>寺<sup>てら</sup>て白<sup>はく</sup>皇<sup>わう</sup>居<sup>き</sup>の裏<sup>うら</sup>なりと<sup>なり</sup>お付<sup>つ</sup>や<sup>なり</sup>なり  
 ち<sup>なり</sup>小<sup>こ</sup>親<sup>せ</sup>を重<sup>おも</sup>なりとけりい引<sup>ひ</sup>火<sup>か</sup>奴<sup>ぬ</sup>の居<sup>き</sup>なり



酒やうの一産退法の観音

かのもろろ鬼ころこ

けしきふしきして

父方の時そもろの山を

あーのあーは 藤のそへ

水口

る藤野大湯まうて 蒼ふれは所左遷の時  
の云達四ヶ所は 藤遷す一ヶ所 藤にまうてあま  
けしきふしの時 藤水は藤まうてけしき

の卿まをうふけ 藤藤今 藤まうて 又藤水  
はまー 般人の子孫け村まう 藤藤にまう 藤藤  
の藤まう 藤藤金まうまうまう 藤藤人 藤藤  
まう 藤藤まうまう

藤藤は藤の口 藤藤

石

けしき金山村まう 中古 藤山まう 坑口まう 金山  
金藤村の山藤まう 石藤まう 藤藤まう 藤藤  
藤藤 藤藤まう 藤藤藤藤まう 藤藤藤藤

のこけ名わい 雲山藏とて、山あり 穀すゝかを以て  
 動くもよし 子と 動を 刃を 降め 僅に 括弧を以て  
 押す 名あり 衣を 動くも

権田村通り一ふ雨あめ上うへううつつ新あらた女をんなのいほまきをくけて洗を  
濯すすせり新あらた河がは也や江えのきしそとて

平、高のち、やま、ん、街、の

いそよふ御山の隅の虹

姜氏

溝村り 沟古 懐あゝ 三利 將軍 義尚よりり  
懐<sup>なつ</sup>篋<sup>ふ</sup>て 篋<sup>ふ</sup>りーとてて

新芒むくの姿ハあつて

三町年三沙の橋

大津

石山といふ實郡石山あり石見山といふ新志  
朝人なりし人石山の峰より水は村のまへと  
て流るを能くし石山の麓にふるき能くするに類  
するに仁治元年十月十三日從三位左大臣行能

とあるけ頼をうて

月をまり 秋の涼や草のた

るしちのちをうて

秋のちもほろろ ちとりの川

月をぬの 波のいさき

ちをぬの ちをぬの ちをぬの ちをぬの  
けちをぬの ちをぬの ちをぬの ちをぬの  
ちをぬの ちをぬの ちをぬの ちをぬの

水のちや ちをぬの ちをぬの

栗津野系又栗津社 古跡あり 大津ねあり

ちをぬの ちをぬの ちをぬの ちをぬの

ちをぬの ちをぬの ちをぬの ちをぬの

ちをぬの ちをぬの ちをぬの ちをぬの

ちをぬの ちをぬの ちをぬの ちをぬの

ちをぬの ちをぬの ちをぬの ちをぬの

ちをぬの ちをぬの ちをぬの ちをぬの

ちをぬの ちをぬの ちをぬの ちをぬの

馬場村より我村まである本宮我村我村の地佛を  
 小御方へ授け小宮我村の地佛あり其宮宮の  
 本佛を安けするも新創のいふなり  
 此良なるいふ村あり此良川あり神宮あり生  
 のいふ言峰よりいふ系師ありやふあり  
 此良の神はとて白紙此神をいふ傳説をいふ  
 大なるいふいふいふ此良のいふ

いふいふのいふいふいふいふ

岩根ふもいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふ

此敵山は大敵山に二列の膝より枝又禪殿又  
 天台山又台嶺又良嶺又北敵又都宮生とも  
 我まれ 拾事集り意法 山山山の山のう  
 とい小鬼のうといいふいふいふ  
 二は西まあり空住たより神他親言安置

いふいふいふいふいふいふ 禪殿山

日宮山王神社大玄參神 大國主大神ニ云  
參神 國常之尊ト拜殿ニ掲グ六ツの勾ノ都鄙  
の傳世の名勾を撰クテニテ六奇仙をミ似テ  
あるを勾を眞字寫ス

[illegible]

三浦 三人のいふのも聞く

浮城の如きちねお平月 貞室

ちんぽうふくやもの衣人  
正成

一考のあはれきうんきむ  
それ

梅屋

いふことあるいふとき  
女

わらわれ七人の勝を八重様  
幸和

宗周

明也、や、  
あ、い、す、お、

三ノ原

親の枝よりし里や棚床木 常規

毛の三節たしつてらんゝ思ふも 西鶴

希世の才の銭やあけひり 芭蕉

水邊で産む枝の森夢が 和及  
は伊

浮葉巻系一連の用情とたれ 素重

栞ぬきとてうりあふむしうが 枳風

と一去年の病ひろそんわ母系 信徳

右轂のひりやうねん山栞 如來

栞書やきつゝあふふ西 其角

頂上あふ師その思ふふめり 一休

初あふ足跡ちつゝその言 一晶

とつゝあふ思ふふめり 女房

り月ふふのめりあふめり 都水

浅舟や思ふふめり 三老

いゝゝゝして栞んそ栞 奉白

門縁やうそ思ふふめり 松涛

むらゝてあふふめりあふめり 来山

時はさひゝゝ思ふふめり 瓢泉



新刊 いろはのまゝてゑしや  
七巻

色々の氣下をかりきく  
柳水

にちろく 抄 卷之三 九 出 鬼 子

子細にハエの糸を  
風子

唐侍一ツ松唐彦の屋をある涙をむく——吾孫君  
様主——とて枝葉絶えぬはなひ長きとけし潮風

湖邊を築きしをくしけ亭と名づくるもや三つあり  
 遠くより見るに石の臥ある木蔭をくしけ亭といふ  
 湖より遠くをくしけ亭に樹をまき一様なるあり  
 湖よりくしけ亭より三つあり

は、ふもかきまの

志賀の里ハ三井の少田村あり宗我西郷正壽も  
新に家系傳あり又志賀の花園あり又新なるを  
いふなり又志賀山城志賀里系傳あり又  
峠をく山の中里白川村を經く宗師あり又

山中城といふ 志賀元国と

はなびあふみの浦より浪もて

山のわにをも 拾ふ峰入

ふらふらとていをもよつて

うやまふいさき名もとも

及たふぬ 及とふと志の志

色をも志とふと志と志と

志賀の都古の志賀里西村所新用と今

度并山所斗四方と上櫃の地あり 号をいつてけ地甲

と井村ありと清水とさきと事多し 田畑の程あり

掘て清水とさきと事多し 掘て清水とさきと事多し

の地又い神在佛國古の地とさきと事多し

とさきと事多し 長き山園城と志賀と事多し

一名三井とと福に天台宗修験及と事多し

境界けちの産をよめて

あれうと娘ふ女のあるあれ

う。何とて志賀の産と事多し

大津の志賀を園といふ 志賀といふ 志賀といふ

八州國西之平八州京よりふりて三宮大坂まで  
十四里こゝ又草津まで三里半餘り旅所の  
名を八所といふけだいはれぬ淡海國牛の産  
物魚物等船より運びいづれより市をあらて事終  
交易を所ぬれず六所端度の花をぬきより大津  
より天智天皇元年三月是より事終の所近江  
杵ノ國帝六年三月近江に遷都すなり是時  
天下百怪遷都を以て河津と云ふ者ありと云  
示

近江國四郡を板山の端より東上して所はちの  
よりより又文徳天皇天武元年ゆき板山の  
國を以て國とす人又言門より板橋云々人  
兵具殿室は隣り金剛力士のやゝ念奴のまゝを  
けりぬいより四代よりいづ國とす人天智を  
國兵士の号を賜ふ今よりあてはる所は福原  
より兵士の末より一宮ありといふ一國所神の  
あ祀しけり初めより正徳年中も門に  
淨土なるいけ事なり又いけ福原のい



もふうきいふーわーいはん田海は舞／＼せきあひー  
看まゝゝゝゝれんをけけるものも縁／＼のゝうやうに  
家いぢゝて月のゝでゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
文を席／＼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おんのきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

風はちや紋の海を渡る  
あつた川を渡る

あつた川を渡る

あつた川を渡る

あつた川を渡る

あつた川を渡る

あつた川を渡る

あつた川を渡る

あつた川を渡る

